吉田有理　福島民報　連載コラム

圏外のアンテナ

［ロビ２］の巻

　友人のＣちゃんは、５年前、乳がんを患った。幸い、手術も、その後のホルモン療法も、当初の計画通りにうまくいった。今月が、術後丸５年である。

　端から見るとあっという間。だが当人には、いのちを愛おしむような日々だったのかもしれない。

　先日、彼女の事務所に立ち寄ると、マックを使ってデザインワークをしていたが、手を止めて、「ちょっと、聞いてよ」と、仕事上のよもやま話を始めた。

　ふと、デスクを見ると、アイデア帳に鉛筆で可愛いロボットの落書きが…。

「ね、これなぁに？」

「へへ、『ディアゴスティーニ』って、知ってる？」

「創刊号〇百円！の雑誌ね。確か友達の彼氏が安土城を作ってた」と、わたし。

「うん。そこから、今度ロボットが出るんだ。定期購読を申し込んだの」

「うわ！何でまたロボット？」目をパチクリさせて尋ねると、彼女はルンルンと紹介動画を見せてくれた。

　名前は「ロビ２」。身長は３４㎝、体重は１㎏。起きている時、カラダは脈動や呼吸をしているかのように動くのだという。今までのロボットの中でも、とびきり人間っぽい奴らしい。

「靴の色は、大好きなオレンジにするつもりなんだ」

　そういうＣちゃんは、たくさんの外資系企業の広告デザインの仕事をしてきた。いつだって大忙しのバリキャリ（できるオンナ）である。だが「ロビ２」を語る表情は、今までに見たことがないほど甘くトロけている。

　創刊日の夜、Ｃちゃんにメールをすると、

「朝、出掛けに届いて、今帰宅したところ。これからビールを飲みながら、作り始める！」と気合十分。

　病が癒えた友のもとに、やって来てくれた「ロビ２」。Ｃちゃんは、ドライバー１本で、十月十日（とつきとおか）の倍に当たる８０週を掛けて、ロボットにいのちを吹き込み、吹き込みながら元気になっていくのである。

=２０１７年６月２３日掲載=

「週刊ロビ２」の創刊目前、Ｃちゃんの落書き